

# ぼんぼん時計

## JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター  
四半期報告  
(2008年4月～6月)

小山 佐和

### < 目次 >

はじめに	1
1. ドイツ連邦レベル等での学術動向	2
♪1-1 HRK はエクセレンス・イニシアチブの第二回目への継続を希望	2
♪1-2 シャバーン連邦教育研究相は08年の未曾有の高額研究予算を09年に更新要求予定	3
♪1-3 AvH が共催で第二回目をウエルカム・センターの募集を開始	4
♪1-4 欧州委員会が日本におけるヨーロッパの研究者ネットワーク構築を開始	5
2. ボン研究連絡センターの活動	6
♪2-1 来訪&訪問、会議出席等	6
♪2-2 第13回日独シンポジウム「海洋研究」開催	7
♪2-3 JSPS サマープログラム 出発前オリエンテーション開催	8
♪2-4 その他の活動	9
3. 今後の予定	10

### はじめに

6月末を以て、センター長及び副センター長が交替いたします。  
田中靖郎センター長は平成7年4月以来、第3代ボン研究連絡センター長としてドイツにおけるJSPSの対応機関をはじめ多くの研究者及び研究機関等との信頼構築に活躍されました。また第1代、第2代のセンター長が築かれた当センターの活動の基礎を更に大いに発展させるためにひとかたならぬご尽力をなさいました。読者の皆様には、田中センター長を筆頭としますボン研究連絡センターへの日頃のご支援ありがとうございました。深く御礼申し上げます。

7月1日以降の後任のセンター長は、元国立天文台長、前総合研究大学院大学長の小平桂一(こだいら けいいち)先生です。JSPS対応機関であるDAAD奨学生としてドイツのキール大学に於いて博士号を取得されました。以来ドイツとは緊密なご関係をお持ちで、また広く豊富なご経験をお持ちの小平先生がセンター長として就任されることは、ボン研究連絡センターと致しましては大変心強く、今後の活動に更なる飛躍が期待され

ます。読者の皆様方におかれましては、小平センター長率いるボン研究連絡センターを今後ともお引立ていただきたく、どうかよろしくご支援くださいますようお願いいたします。

なお、当センターは副センター長も同時に交替いたします。その後任は、以前1年間当センターに於いて研修を実施した宮元博央(みやもと ひろひさ)さんです。より良いセンター運営及びより充実した報告書の執筆等をいただけることと存じますので、皆様、今後ともどうかよろしくご指導、ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。また、これまで、私にも多くのご指導、ご声援を賜りましたことを大変感謝いたしております。どうか、今後ともよろしくお願いいたします。

## 1. ドイツ連邦レベル等での学術動向

### ♪1-1 HRKはエクセレンス・イニシアチブの第二回目への継続を希望

[http://www.hrk.de/eng/download/dateien/Exzellenzinitiative\\_gm.pdf](http://www.hrk.de/eng/download/dateien/Exzellenzinitiative_gm.pdf)

(HRKプレスリリース No.21 2008年5月28日)

[http://www.hrk.de/eng/download/dateien/PM\\_Exzellenz-gm.pdf](http://www.hrk.de/eng/download/dateien/PM_Exzellenz-gm.pdf)

(HRKプレスリリース No.16 2008年4月23日)

エクセレンス・イニシアチブに第2回目の募集が実施されるのか、第1回目の採択課題は5年間の支援期間終了後も継続支援されるのか否か等については、関係者の間では関心が高いものの現時点では、連邦教育研究省やDFGのプレスリリース上は、エクセレンス・イニシアチブの第2回目の募集に関しては特段の言及はない。

高等教育機関長会議(HRK)は、4月22日にイエナにおける総会(General Assembly:最高決定機関)に於いて、さらに5月28日の評議会(Senate:特に州との関係が深い中長期の政策の協議機関)に於いて、2011年に終了するエクセレンス・イニシアチブ事業を今後とも継続拡大すること希望し、更なる事業及び予算の充実(1.5倍)を必要とする旨発表した。

HRKは、その最高決定機関である総会に於いて、現行のエクセレンス・イニシアチブに対し高い評価を与え、高等教育機関に於ける研究を有意義に支援してきたとして評価した。よって、現行の採択課題のうち評価の良いものは、2011年以降も継続すること、また第2回目の募集を実施し優秀な研究が新規の課題として応募することができるよう設計すべく、さらなる充実を要望している。このために第1回めの予算の5割増し(約10億ユーロ増)を「現在の(同事業実施課題の)前向きな結果からすれば、この数字はかなり控えめな金額に見えるはずだ。」としている。

エクセレンス・イニシアチブが高等教育機関にもたらした効果として、Wintermantel議長は、1)エクセレンス・イニシアチブ事業が高等教育機関間の競争と、研究者の各所属機関への帰属意識を強めたこと、2)高等教育機関の地位及び価値が一般社会に於い

て可視度が高くなりかつ注目されるようになったこと、3) 高等教育機関と学外研究機関の戦略的パートナーシップの強化に貢献したことを挙げている。また、5月23日のSenate会議においても、さらに最も秀でた研究に弾みをつけたことはもとより、学内経営能力の増強に貢献した旨をその効果として評価している。

ただし、充実させるべき点も指摘し、今後、エクセレンス・イニシアチブの共同審査を担当する学術会議(Wissenschaftsrat:the German Science and Humanities Council)及びDFGに対して、今後の事業審査について、具体的組織構造を計画し、提出を予定しており、HRK評議会(Senate)が7月8日に構想を提示することとなっている。

HRK評議会(Senate)はまた、先進国における強力なリサーチユニバーシティは常に教育に於いても中核拠点であり、将来の研究は教育との組み合わせで更に支援されねばならないことを指摘している。

### ♪1-2 シャバーン連邦教育研究相は08年の未曾有の高額研究予算を09年に更新要求予定

Dpa Nr.22/2008 pp.4-5  
(dpa 第22号 2008年5月26日版を参照)

ドイツの今年の研究予算は112億ユーロである。このような高額な支出は先例がない。ドイツに於いて研究白書は2年毎に発行される。本年はその白書の発行年である。シャバーン連邦教育研究相(CDU)は5月21日にベルリンで新しい白書の公表にあたり「予想通り、イノベーション環境は概ね改善された。」と言及した。研究費は、2005年度支出比で、24%増であった。2008年の研究予算はこれまでになく巨額であったが、シャバーン大臣は、この白書及びリスボン戦略の達成目標を根拠として、2008予算に更に4.7億ユーロ加えた2009年予算要求を試みている。

EUリスボン戦略に於いては、2010年までに政府及び産業界からを併せた研究助成額をGDPの3%に増やすことを計画している。ドイツは、今年2.7%となり、EU平均を1.84%上回っている。

ドイツ学術助成団体連盟の報告によると、世界の研究助成額の対GDP支出比はイスラエル(4.49%)をトップとして、スウェーデン(3.82%)、フィンランド(3.45%)、日本(3.33%)、韓国(2.98%)、スイス(3.82%)である。アメリカは2.62%、中国は1.43%である。

ドイツは、政府支出対産業界支出が1:5となっている。2009年度の予算要求に於いてシュタインブルック財務相(SPD)との論争に於いて、シャバーン教育研究相は、「更なるハイテク・プロジェクトへの投資のためには一歩も譲らない。」とリスボン戦略の目標パーセンテージ達成を強く決心している。

2009年度の研究助成金は、GDPの2.85%を目指している。この上に、シャバーン大臣は4.7億ユーロ増を申請している。経済(産業)大臣(CSU)も研究開発経費支出増を望

んでいる。これに対し、財務大臣は、節約の精神の欠如を批判し、連邦財政の再建の危険性を案じている。シャバーン大臣としては、本件は6月末までに解決し、2009年には、新たに研究助成資金が増加されるだろうと楽観視している。

経済界も研究開発投資を強化しており、2005年の約42億ユーロから2007年は約428億ユーロへと投資額が伸びている。これに加え、企業は大学や研究所に113億ユーロ程度研究を委託している。このような状況であっても、経済界関係者は2010年までに3パーセントの目標を達成できるか否かについて非常に懐疑的である。

企業も研究開発部門に多くのスタッフを雇用している。2006年には前年の2.5%増しの312,000人を雇用し、2007年は報告書によるとさらに2.5%増しの320,000人と見込まれている。研究開発は設計からデザインまでに及ぶ知識集約分野であるため雇用の伸びが見込まれている。

シャバーン大臣によると、連邦および州によるハイテク戦略は確かなものとなった。MPG, DGF, 及びフラウン・ホーファーと大学は年内に26億ユーロを連邦から配分されている(2005年は18億ユーロであった。)。健康医療、気候及びエネルギー、光学的方式(optische Verfahren)及び生物工学に特に多く支出されている。

白書は、研究開発のための支出増と並行して、ハイテク戦略による構造改革を強調している。気候問題や資源保護問題の解決のような大規模な挑戦に向けた研究に新たな優先順位が付与されている。産学間の戦略的協力は増加しており、更に、中流企業向けの研究助成が優先的に強化されている。

一方で、FDPのUlrike Flach研究エキスパートのように数字上の結果にばかりに頼って、内容を見失わないよう忠告する向きもある。前任の教育研究相が掲げたハイテク戦略の2本柱(直訳すると「2つの灯台」：zwei Leuchttuerme)は崩壊してしまったからである。トランスラピッド(ドイツの実験リアモーターカー)の建設案は、計画経費だけで何百万ユーロもかかっており、電子健康保険カードの作成も遅延のうえ見込みが立っていない状況にあるためである。

### ♪1-3 AvHが共催で第二回目をウェルカム・センターの募集を開始

[http://www.humboldt-foundation.de/pls/web/wt\\_show.text\\_page?p\\_text\\_id=34485](http://www.humboldt-foundation.de/pls/web/wt_show.text_page?p_text_id=34485)

(AvHプレスリリースNo.13、2008年6月2日)

を参照

フンボルト財団(AvH)は、ドイツテレコム財団及びドイツ学術振興寄付団体連盟と共催で、第2回目のウェルカム・センターの募集を開始した。これまで、当「ぼんぼん時計」にも幾度か報告してきたとおり、ウェルカム・センターは、研究者の流動性を高め、以て優秀な研究者を育成・獲得するにあたり、外国へ派遣されるまたは外国から受け入れる研究者(主に後者)に対する研究外の種々の不安材料を取り除き、研究に専念できるよう研究環境を整える作業を研究者個人でなく、大学が組織的に支援する体制を

整備する計画を助成し、各採択大学が得た好事例を他のドイツの大学に於いてシェアすることを目的としている。

大学の支援体制として挙げられている方法としては、滞在初期の困難を軽減するための中央窓口を設置する、単発で住居探等実質的支援をする、事務手続きを引き受ける、社会との接点を設立することなどがある。近年は、特に配偶者も研究者だった場合、配偶者も就業機会があるか否かが、選択肢として大きな役割を占めてきていることも重要である。

第1回目の募集時には、全大学の半数が応募し、うちボン大学、ボーフム大学及びマールブルク大学が採用された。

今回も、採用された大学には、上限125,000ユーロが支援され、申請書に計画した構想を実施することとなる。締切は本年8月15日、採用大学は本年10月に決定する予定である。

#### ♪1-4 欧州委員会が日本におけるヨーロッパの研究者ネットワーク構築を開始

<http://europa.eu/rapid/pressReleasesAction.do?reference=IP/08/945&format=HTML&aged=0&language=EN&guiLanguage=fr>

(EUプレスリリース No.945、2008年6月16日)

[http://www.deljpn.ec.europa.eu/home/news\\_en\\_newsobj2543.php](http://www.deljpn.ec.europa.eu/home/news_en_newsobj2543.php)

(EUニュース No.171/2007 2007年11月29日)

を参照

欧州委員会の Janez Potocnik 委員は、日本で研究するヨーロッパの研究者のネットワーク構築を開始する旨、2008年6月16日にブリュッセルに於いて公表した。日本に滞在するヨーロッパの研究者でネットワーク構築を望んでいる者は、オンライン調査に於いて74%にのぼったことが明らかになってきたため、その構築の主な目的は、研究者側のニーズに対応しており、研究者間の交流のほか、就職情報、研究支援事業情報、日欧協力情報へのアクセスが盛り込まれる内容として挙げられている。欧州委員会はすでにアメリカに ERA-Link/USA を設立しており、我が国はこれに次いで相互交流ツールを構築することとなった。構築されるネットワークは ERA-Link/Japan と命名され、欧州委員会の研究委員会(DG for Research)と欧州委員会東京代表部が支援する。

(政策的背景には、)日本と欧州は世界のGDPの40%を占め、互いに貿易投資の主要相手先であること、産業競争や持続的発展といった問題対策として研究とイノベーションが戦略的に重要であることを日欧ともに確信しているところといった、経済発展への期待がある。その戦略の一環として、研究者は研究者に特化した連携の便宜を得たり、就業機会を見つけたりするべき将来の財産とみなされている。

日本には、数千人単位のヨーロッパの研究者が滞在しており、世界的な研究開発の戦略的な地位を占めていることから、日本は「外国におけるヨーロッパの研究者(ERA: European Researchers Abroad)」の、アメリカに次ぐ早期対象国となったようである。



調査は571人の日本に滞在するヨーロッパの研究者を対象に実施された。65%は東京以外在住で、67%は滞在5年未満、日本語の知識が皆無の研究者は10%で63%が基礎または日常会話程度の日本語の知識を持つとの結果であった。彼らの中には、ヨーロッパの支援事業に関する知識を持っている者は少数で、EUの第7次フレームワークプログラムやEuropean Research Area (ERA)のことを知らないものもいた。このことから、研究者自身がネットワーク構築を希望しており、ニーズが多かった。

同ネットワークは次のようなサービスを提供する：

- 1) ヨーロッパの研究支援情報、就職情報、ヨーロッパ「で」のまたはヨーロッパ「と」の就業機会情報を掲載したウェブサイト
- 2) Eメールによる新情報の提供
- 3) 外国におけるヨーロッパの科学コミュニティに対する特別な関心を記事にしたニュースレターの発送（研究開発のブレークスルー、政策展開、現行の国際共同研究、会員からの情報等を含む）
- 4) 滞在国（地域）に於ける会員のネットワーク、会合、イベント情報
- 5) 就職フェアへの参加企画やヨーロッパの産業界、研究所等の想定就職先に研究者が出会えるためのフォーラムの提供
- 6) 研究者の情報交換ツールの提供

European Research Areaは、外国にいるヨーロッパの研究者は、彼らがヨーロッパに戻るとしても滞在国から戻らないとしても、彼らを貴重な財産と考えている。滞在国とヨーロッパの研究協力関係を強化し得る限り、「知の獲得」や「知の損失」ではなく、「知の循環(brain circulation)」が成り立ち、以て効果的な人的パートナーシップを形成し得る。このことから、研究者連携支援は、研究者に対して、開かれた、競争的で魅力的なヨーロッパ労働市場の戦略的開発にとって重要である。

なお、先行のアメリカでのネットワークはやはり、Potocnik 欧州委員が2006年6月に公式に設置したもので、現在会員は3500人以上いる。

## 2. ボン研究連絡センターの活動

### ▶2-1 来訪&訪問、会議出席等

#### 【4月】

- 04月01日(火) 野尻国際協力員が赴任
- 04月14日(月) 小山が業務打ち合わせ(～19日)(於 東京)
- 04月14日(月) ガンター職員及びシュルツ職員が業務研修を実施(於 ボン)
- 04月22日(火) 小山、ガンター職員がHRK総会に於いてJSPS事業エキシビションを開催(於 イエナ)
- 04月23日(水) 小山がAvH主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション(JSPS外国人特別研究員を含む)及び帰国者報告会出席(於 ベルリン)

## 【5月】

- 05月16日(金) 第13回日独シンポジウム開催(～17日)(於 ロストック)  
 05月21日(水) 小山がDFG 共同研究センター担当 Ms Redoehl と打ち合わせ(於 ボン)  
 05月23日(金) 小山がCS3 準備会合出席(～25日)(於 アスマンスハウゼン)

## 【6月】

- 06月02日(月) 小山が在独日本大使館福井一等書記官訪問、DFG Heinz Maier-Leibnitz Prize 授賞式出席(於 ベルリン)  
 06月03日(火) 田中所長がAvH 主催フェオドア・リュネン・フェロー審査会出席(於 ボン)  
 06月05日(木) JSPS サマープログラムのための渡航前オリエンテーション開催(於 ボン)  
 06月06日(金) 田中所長夫妻、小山がAvH Schwalz 会長、Schutte 事務総長、Pfeiffer 前事務総長と昼食会(於 ボン)  
 06月09日(月) 小山がBMBF、ベルリン日独センター共催のJunior Expert Exchange Programme に於いて日本人研究者のためのドイツ研究渡航及びドイツの共同研究に係る事業紹介(於 ボン)  
 06月11日(水) 小山がAvH Manderla 課長、Belz 課長、Baszio 課長、Spall 課員と懇談(於 ボン)  
 06月23日(月) 小平桂一新所長夫妻がボン研究連絡センター訪問 事務打ち合わせ  
 06月23日(月) 小山がDAAD Toyka-Fuong 課長、Irene Janssen DAAD 東京事務所長と懇談(於 ボン)  
 06月24日(火) 小山がDFG Kruessmann 課長と懇談(於 ボン)  
 06月26日(木) 上田浩二 ケルン日本文化会館長がボン研究連絡センター訪問  
 06月27日(金) 田中所長とガンター職員がERC 調査(於 ブリュッセル)  
 06月29日(日) 小山がボン研究連絡センターを離任(30日日本着)  
 06月30日(月) 田中所長がボン研究連絡センターを離任

**♪2-2 第13回日独シンポジウム「海洋研究」開催**

JSPS ボン研究連絡センターは、「ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会」との共催により、毎年日独シンポジウムを開催している。同シンポジウムは、日独両国が優れた成果をあげている学術分野から先端的テーマを選び、両国の専門研究者の講演と討論を通じて理解を深めるとともに、日独協力の促進をはかることを目的とするものである。本年は13回目にあたり、5月16日(金)及び17日(土)にドイツ国メクレンブルク・フェアポンメルン州のハンザ都市として栄えた港湾都市ロストック市において歴史的な建造物である”Barocksaal”に於いて開催した。テーマは、この地での開催にふさわしい「海洋研究」である。ドイツの最北とも言える市での開催にもかかわらず、日本との共同研究を経験した研究者を中心に160名以上の参加者が集まる盛況な会となった。

「海洋」は、地球の70%を占めることから、昨今の注目を集める気候変動と関係が深く、また資源の面からも人間に及ぼす影響は至大である。今回は、この人間との関わりの深い「海洋」の研究を3つのサブテーマから捉え、顕著な研究活動をされている先生方を講演者として日本から3名、ドイツから4名お招きした。



まず、基調講演として、Prof. Wolfgang Fennel, Deputy Director, Baltic Sea Research Institute Warnemuendeが北海を例に海洋エコシステムに関する講義をした。これに続き、「(1) 海洋と気象・気候」をテーマに、Prof. Toshio Yamagata, University of Tokyo, Department of Earth and Planetary Science (写真) と Prof. Jelle Bijma, Alfred-Wegener-Institute Bremerhave, Marine Biosciencesが講演した。次に「(2) 生活を支える海洋」をテーマとして、Prof. Ralph Schneider, University of Kiel, Excellence Cluster “Future Ocean”と Prof. Yasuwo Fukuyo, University of Tokyo, Asian Natural Environmental Science Centerが講演した。最後に「(3) 海洋が人類の未来に及ぼす影響」をテーマとして、Prof. Masaaki Wakatsuchi, Hokkaido University, Institute of Low Temperature Science と Prof. Detlef Czybulka, University of Rostock, Law Facultyが講演した。

このように物理学、生物学から法学に至るまでの様々な分野からの学術的アプローチから構成された講演に対して、異分野の研究者たちからなる聴衆達は、活発な質疑によって応え、彼らの関心の高さが伺えた。なお、この各サブテーマごとの講演者たちの紹介と質疑をマネージした議長4名は、「ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会」の会員である。

また、同シンポジウムの共催者である同同窓会は、シンポジウム終了後に年次総会を開催した。本同窓会は、JSPSの協力のもとに、独自の活動を実施しているが、



昨年同時期に比し、年会費を納める正会員数が1割以上増えた。

### **♪2-3 JSPS サマープログラム 出発前オリエンテーション開催**

ボン研究連絡センターは毎年 JSPS サマープログラムに採用された若手研究者に対し、出発前にオリエンテーションを開催している。参加者の日本での2ヶ月間の研究を出来る限り有意義なものとするため、過去の参加経験者が自らの日本での研究体験などを伝え、同プログラムに参加する仲間同士の親近感を深めること、また、この機会に J S P



S及び本事業の公募に協力しているDAADが行う日独協力事業に関する理解を深め、両国の交流に貢献する一助となることを目的としている。本年は、6月5日に開催し、採用者の14名うち、10名が参加した(写真)。



始めに、田中靖郎ボン研究連絡センター長から、開会の挨拶として、JSPSの国際交流の目的の紹介と若手研究者の交流の意義、及び参加者の今後の活躍に対する期待が述べられた。その後、DAADのMs Karin Moeller(日韓豪ニュージーランド太平洋担当)から、主に日独交流事業に係る説明がなされた。参加者の自己紹介に続き、当センターよりJSPS国際事業概要及びJSPSサマープログラムの概要を説明した後、昨年度の参加者3名による体験談が披露された。

フェローによる体験談については、東日本滞在者・女性の代表として、ハノーバー医科大学のDr. Malanie Wurm(医学、実験動物中央研究所にて研究)と、西日本滞在者・男性の代表としてDLRケルンのDr. Andreas Orth(計算科学、九州大学にて研究)及びボン大学のHendrik Steigerwald(物理学、九州大学にて研究)(写真)の協力を得た。3名の発表は、写真を多用し、一週間の合宿期間から研究室や滞在先での研究と交流の様子、日本滞在中に印象に残ったことなど、それぞれの体験が生き生きと伝わり、参加者にとって、サマープログラムに参加することについての詳細で具体的なイメージを与える大変有意義なものであった。体験談発表の後には活発な質疑応答が行われた。プログラムの制度設計自体に関するものから、習慣や言語環境、国内の交通事情など生活に関するもの、大学における研究環境に関するものなど質問は多岐にわたり、JSPS職員や同年代の同国人による視点からの説明は非常に参考になっただけでなく、疑問点と回答をフェロー間で共有できたことがとても良かった、という感想が聞かれた。参加者間での情報交換・共有も打ち解けた雰囲気の中で盛んに行われ、また、近年フェローが自発的に作成しているTシャツについても話題が及び、本年度も参加者間でTシャツ作成について検討されるようである。



その後、ドイツ日本学術振興会研究者同窓会役員であるProf. Dr. Ingrid Fritsch(美学、ケルン大学)から、帰国後も未長く交流を継続するため、JSPS同窓会の紹介があり、最後に参加者全員での夕食会となった。参加者は互いに非常にうち解け、当センター職員、同窓会員、昨年度フェローに対し、夜中まで日本文化や生活習慣に係る質疑が続き、また参加者各自の日本での活動計画の紹介などで大いに交流が深まった。これを機に日独交流および若手交流が広く深く継続することを望んでいる。

## ▶2-4 その他の活動

- ・ 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- ・ 情報提供ホームページ”forschen-in-japan.de”の拡充作業

- ・ドイツ語版ニューズレター(ルンド・シュライベン)等の作成・配布
- ・各種照会、各種情報収集・調査、各種情報提供業務
- ・日本学術振興会事業の広報(資料出展、HRK ニュースレター掲載ほか)
- ・ドイツ訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- ・事業の審査・広報に協力する対応機関との協議
- ・第13回日独シンポジウム(2008年5月開催)開催準備
- ・第13回日独シンポジウム(2008年5月開催)開催報告
- ・JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション(2008年6月開催)開催準備
- ・JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション(2008年6月開催)開催報告
- ・JSPS ボン研究連絡センター年次報告会(2007年8月開催)準備
- ・JSPS ボン研究連絡センター所長交代式(2007年8月開催)準備
- ・JSPS 事業説明会(2008年10月開催予定)準備
- ・DFG とのラウンド・テーブル(2008年1月開催)開催準備
- ・DFG とのラウンド・テーブル(2008年1月開催)開催報告書作成

### 3. 今後の予定

#### 2008年

- 07月01日(火) 小平桂一新所長がボン研究連絡センターに着任
- 07月02日(水) 小平所長が、ベルリン日独センター佐藤副事務総長訪問、在独日本大使館高野大使訪問、DFG 年次総会出席(於 ベルリン)
- 07月03日(木) 小平所長が、AvH Schwalz 会長、Schutte 事務総長と懇談(於 ボン)
- 07月03日(木) 宮元副所長がボン研究連絡センターに着任
- 07月07日(月) 小平所長、宮元副所長がDFG von Kalm 第一局長、Kruessmann 課長訪問(於 ボン)
- 07月07日(月) 小平所長、田中前所長、宮元副所長、ガンター職員及びシュルツ職員がDFG von Kalm 第一局長、Kruessmann 課長等と昼食会(於 ボン)
- 07月08日(火) 文部科学省加藤国際交流官がボン研究連絡センターを訪問
- 07月10日(木) 宮元副所長が名古屋大学とボッヘム大学 ITP に基づく覚書署名式出席(於 ボッヘム)
- 08月07日(木) AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション(JSPS 外国人特別研究員を含む)及び帰国者報告会出席(於 ボン)
- 08月21日(木) 「学振のタベ及び所長交代式」開催(於 ボン)
- 10月07日(火) AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション(JSPS 外国人特別研究員を含む)及び帰国者報告会出席
- 10月16日(木) JSPS 事業説明会開催(於ボッフム大学)及びJSPS ドイツ同窓会による「会員による会員の招待」参加(~17日)(於 ボッフム)
- 秋または冬 第5回日独コロキウム開催

#### 2009年

5月 第14回日独シンポジウム開催 (場所未定)  
初夏 JSPS サマープログラムのための渡航前オリエンテーション開催 (場所未定)  
晩夏 「学振の夕べ」開催 (於 ボン)